

「WINDS CAFE × スリーシェルズ 共催」 WINDS CAFE 243 in 板橋

# 佐藤洋嗣コントラバスリサイタル

## 日本のコントラバス作品 その可能性

2017年3月26日(日) 14時開演 会場：安養院 瑠璃光堂 板橋区東新町 2-30-23

予定演目(演奏順)

増本伎共子：My 六段(委嘱初演)

下山一二三(1930-)：深響第3番(委嘱初演)

松平頼暁(1931-)：Replacemento(1987)

川島素晴(1972-)：The YAGI 節(2001)

〈休憩〉15分

藤倉大(1977-)：es(2013/日本初演)

磯部英彬(1982-)：ナポリ・インバータ～コントラバスの音素材と映像による(委嘱初演)

黛敏郎(1929-1997)：BUNRAKU(1960)

湯浅譲二(1929-)：Triplexity(1974) 〈休憩〉15分

佐藤洋嗣(コントラバス・企画構成) 西耕一(司会・企画構成) 磯部英彬(作曲・音響)

WINDS CAFE とは、1997年1月から、川村龍俊が、音楽を中心に美術演劇映画などさまざまなジャンルの方々に企画していただきながら続けている、イベントです。WINDS CAFE のコンセプトは、「好きなことやものを楽しんでいる人と一緒にいるのはなんて楽しいことだろう」です。出演を依頼するときには、このコンセプトを共有していただけることが条件になっています。1997年1月にスタートした WINDS CAFE も、2017年には、ついに21年目を迎えることになりました。今回が243回目となります。

## コンサート開催によせて

コントラバスはジャンルを横断する。

オーケストラ、ジャズ、タンゴ、現代音楽など幅広く、多彩な広がりを持つ。その魅力を引き出そうと様々な作曲家が曲を提供している。今回集められた曲以外にも多様に探求されてきた。縁の下の力持ちとして、ジャンルを横断して愛されるコントラバス。しかし、まだまだ可能性があるのではないか？と思っていた。

そこで佐藤洋嗣との共同での企画コンサートを思いついた。近年めざましい活躍と成長を重ねる佐藤洋嗣の活動はここで述べるまでもない。現代音楽、タンゴ、クラシック、映画音楽、時にはエレキベースまで弾きこなす、多彩なバックグラウンドと、魅力的な演奏で「日本のコントラバス作品を聴きたい」と思った。日本初のコントラバス曲が作曲されてから 83 年。その歴史を踏まえ、過去から現在、そして未来に連なるコンサートを考えた。

本日のコンサートで演奏するのは佐藤洋嗣だけであるが、上演されるのは無伴奏の曲だけではない。多重録音・リアルタイム再生、映像など、最新の技術も駆使して委嘱初演も含む「コントラバスの可能性」が探求・展開される。会場は、美しい日本建築と最新の音響設備をあわせもつ安養院・瑠璃光堂。「日本の作品を、日本特有の建物で演奏する」。

音楽がどのように聴かれるべきかと考えていた私にとって、理想的な空間でのコンサートと言えるかもしれない。

「佐藤洋嗣×コントラバス」ご期待ください（企画：西耕一）。

## 曲目解説

### 増本伎共子：My 六段（委嘱初演）

「六段」というのは、慣れ知っているようでいて実は知っているのは初段(テーマ)と、三段冒頭のグリッサンド位かもしれない。特に初段から二段、つまり第1ヴァリエーションへの境目がどこなのか、それが今一わかりにくい(お箏弾きもそう言っています)。

そこで去年の暮、佐藤さんに「六段で何か…」と云われた時、八橋検校には悪いけれど自分の中で納得のいく「六段」の形を試みた。題して「my 六段」。(作曲者)

### 下山一二三：深響第三番（委嘱初演）

低音楽器にはいろいろあって、チェロやバスクラリネットはとても好きな楽器だが、それにもましてコントラバスは大好きな楽器である。「深響」はコントラバス・アンサンブルにつけているタイトルで 2000 年に作曲した二重奏、次に 2010 年に作曲した「深響第二番」の六重奏がある。今回、佐藤さんの委嘱を書くことになったので初めてコントラバス・ソロを書くことにした。同じ低音楽器でもチェロとは非常に違った特質を持っている。たびたび出てくるトレモロは故郷、津軽の猛吹雪を描いたものである。(作曲者)

### 松平頼暁：Replacemento

溝入敬三さんを想定して 1987 年に作曲。7種類の奏法を設定し、その出現順序は 1 2 3 4 5 6 7, 1 3 5 7 6 4 2, 1 5 6 2 4 7 3 というように規則的に入れ替わる。各奏法の持続時間は、一定、増加、始め一定で後半に増加、始め増加し後半ではそのまま一定、などのように色々な形で変化する。それに伴って音高も変化する。題名はこのことによっている。(作曲者)

## 川島素晴：The YAGI 節

この作品は、日本を代表するコントラバス奏者、池松宏氏による「八木節の編曲を」との依頼に答え 2001 年に書かれたコントラバス 6 重奏曲である。池松氏の CD アルバムにも収録された他、現在に至るまで数多くの再演がなされてきたが、今回のように多重録音による上演は初の試みとなる。

冒頭、どこか遠くから祭りの賑わいが聞こえてくる中、農村風景（「ヤギ」もそこにいる）を描く。全てハーモニクス奏法で奏でられる「八木節」の緩やかなソロが始まると、徐々に祭り囃子のリズムに合流していく。コントラバスで可能なあらゆる打楽器的奏法を散りばめた冒頭部分に続き、その他の様々な奏法や複雑なハーモニーを駆使した合奏が展開。ただの編曲作品として気軽に上演できるものではない、超絶的アンサンブル作品である。

今回、私も立ち合った多重録音は大変な労作で、佐藤氏はもとより、根気よくお付き合い頂き編集作業もご担当頂いた磯部氏には感謝の念に耐えない。独りのヴィルトゥオーゾによる今回のような上演は、これまで以上に精度の高いものであり、とりわけ複雑なハーモニーの精緻なリアライズによってこの作品が意図した音楽構造をようやく実現できたとの感慨はひとしおである。

ところでこの作品、完成した当初は池松氏の意に沿わないものだった。当時 NHK 交響楽団首席奏者だった池松氏は、多数上演していたであろう外山雄三「ラブソディ」における緩徐部分である「信濃追分」の箇所を素材にして欲しかったようだが、それを「八木節」と勘違いし私に伝えてしまったのである。

そこでもう 1 曲、「エレジー」というオリジナル作品を作曲し、それも「The Yagi 節」と同じ CD に収録されたのだが、それについては、あまりにもハーモニーを正確に遂行するのが難しいため、ライブ上演はこれまでに一度しか行われていない。しかしながら、今回のような多重録音であれば、きっと比較的容易に上演できるのではないかと想像するので、是非とも佐藤氏に、そちらも挑んで頂くことを期待したい。（作曲者）

## 藤倉大：es（日本初演）

様々な奏法が 3 分ほどに凝縮され、効果的なサウンドを作り出している。譜面には 3nails と記載される、ツメをつかったギター的な奏法や、視覚的にも興味を引くライトハンド奏法など、音響イメージだけでなく、ヴィジュアルなイメージから紡ぎ出された音も、藤倉らしい特徴といえよう。タイトルは、ロンドン・シンフォニエッタのコントラバス奏者 Enno Senft のために作曲されたためことによる。（西耕一）

## 磯部英彬：ナポリインバータ コントラバスの音素材と映像による（委嘱初演）

佐藤さんと打ち合わせをしている時にちょうどナポリタンを食べていたので、タイトルにナポリと付けました。またインバータとは「逆変換器」という装置の事で電車のモーターや蛍光灯などによく使われています。この作品は事前にコントラバスの音と映像を収録し製作しました。コントラバスは低音の楽器のため、人間が知覚できる倍音をとっても多く含む楽器です。そのコントラバスの音をコンピュータを用いて周波数分析や時間分析をしてみると、普段私が知覚できていなかった魅力的な音がまだまだ沢山ありました。そんな音を沢山集めて、1つの作品にしてみました。まだ私は訪れた事はありませんが、大好きなナポリへの思いが詰まっています。長時間音素材の録音をしてくださった佐藤さんにお礼を申し上げます。ナポリ、ナポリ、私のナポリ、貴方のナポリ。（作曲者）

## 黛敏郎：BUNRAKU

《BUNRAKU》（1960）は、黛敏郎（1929-1997）にとって日本回帰シリーズの嚆矢となった作品である。《涅槃交響曲》（1958）で、鐘の響き、仏教声明の声と抑揚の美しさをシンフォニーへ結実させた黛は、日本の伝統音楽の再発見へ向かう。それは、のちの管弦楽曲《BUGAKU》（1962）やハープ独奏の《ROKUDAN》（1986）などにつながっていく。再発見した伝統の再構築。Remix とも形容できよう。

BUNRAKU=文楽は、江戸初期に生まれ流行した日本特有の音楽劇である。関西訛りの語り、太棹三味線、文楽人形が活躍する。この曲では、太棹三味線のダイナミックな表現から繊細な悲しみを帯びた響き、男性の語りで老若男女を語り分ける幅広い声色、文楽人形の動きの豊富なリズム感など、巧みに抽出。構成も浄瑠璃のドラマティックな要素をまとめあげ、進化させている。

ほんらいはチェロのために作曲された《BUNRAKU》ではあるが、稀有なプレイヤーを迎え、コントラバスという楽器の表現拡張を意図してこの上演を提案した。(西耕一)

## 湯浅譲二：Triplexity

《トリプリシティ》はアメリカのコントラバス奏者の Bertram Turetzky の委嘱によって作曲、1970年7月6日のハワイ現代音楽祭で初演された。3つのコントラバスが「トリプリシティ=三位一体」として音を生み出して、多層的な時間の流れを響かせる。今回のように事前に録音した2つのパートと生演奏による上演だけでなく、3人のコントラバスアンサンブルでの上演も行われている。

銅鑼をアルコで弾く冒頭に始まり、コントラバスから多彩な音を引き出すために楽器のボディ、背面、くびれ、テールピースなどを、指、手のひら、げんこつ、マレット、マラカスなどでも多彩に打ち、豊穡なる音響世界を創出、その楽器の持つ歴史性や成立についても思いを巡らせる。楽譜は、時間の流れが秒数で示され、グラフィックな図形も多用、アドリブによる演奏部分もある。コントラバスという楽器からだけでなく、演奏者の発声・発話なども取り入れている。曲の後半では疑問・肯定の発話部分があり、演奏者が「演奏当日に興味を持っていることを疑問形で発言」。その後、各国の言葉で「はい」「イエス」「ダー」「ウィ」などと肯定して終わる。(西耕一)

### 佐藤洋嗣 Yoji SATO

高校時代はエレクトリック・ベースを演奏し、卒業後コントラバスの魅力に触れ転向。2006年東京音楽大学卒業。現在は室内楽、オーケストラ、アルゼンチン・タンゴなどを演奏し、ソロに於いてもコントラバスの新しい可能性を探りながら演奏している。京都・国際音楽学生フェスティバル、PMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル)、メキシコでのモレリア音楽祭など国内外の音楽祭に参加。アンサンブル・ノマド、シュテルン・クインテット、オルケスタ・ティピカ・パンパのメンバー。山野楽器講師。2011年度バンドジャーナル誌に於いてワンポイントレッスンを連載。2012年東京オペラシティ・リサイタルホールでリサイタルを開催。

### 西耕一 Koichi NISHI

日本の現代音楽評論と企画を専門とする。近年の主な仕事として、セントラル愛知交響楽団による日本の管弦楽曲100周年企画選曲や東京フィルハーモニー交響楽団 黛敏郎個展、京都市響 黛敏郎個展、伊福部昭音楽祭、伊福部昭百年紀、芥川也寸志生誕90年メモリアル、渡辺宙明卒寿記念シリーズなど。『松村禎三 作曲家の言葉』(春秋社)や『黛敏郎の世界』(ヤマト文庫)の企画・編集、CD『松村禎三作品集』(Naxos Japan)解説などがある。オーケストラ・トリプティークと展開する「日本の作曲家シリーズ」では、日本の前衛音楽、近現代音楽、映像音楽をテーマにコンサートを行っている。

### 磯部英彬 Hideaki ISOBE

作曲家。メディアアーティスト。東京音楽大学非常勤講師。作曲及び音響技術、コンピューター音楽を土屋雄氏に師事。コンピュータを中心とした作曲活動のほか様々な他の作曲家の電子作品のオペレーターを担当する。オペラ「RAMPO2011」(土屋雄ほか作曲)や、和光大学特殊音楽祭、「黛敏郎個展」など幾多の公演で音響技術を務めた。MAXIMUM 主宰。